



## 大西学園長を偲んで

## 春日丘に桜散る

## 一大西良三学園長と民族資料博物館

中部大学名誉教授・中部大学民族資料博物館アドバイザー 畑中幸子

春たけなわも過ぎ、桜の花が惜しまれつつ散り始めた頃、大西良三学園長がお亡くなりになりました。

突然の訃報に中部大学職員一同は動揺を隠すことができませんでした。カトリック布池教会でのお通夜、ご葬儀に大勢の人びとがお別れに訪れ、大西学園長のお人柄が偲ばれました。

1984年に中部大学に新学部として国際関係学部が誕生し、その2年後に20号館の4階にのちの民俗資料室につながる活動が始まりました。新学部では、専攻に地域研究が設けられ、それぞれの地域を専門とする研究者が揃っていました。これは中部地方の大学にとっては斬新的な試みで、近隣の高校の先生方を魅了しました。民俗資料室の発想の元は、当時の事務局長、大西良三氏で、その準備に文化人類学者が中心になりお手伝いをするようになりました。

民俗資料室の資料は、研究者たちの寄贈品、現地調査の機会を利用して生活用具の蒐集から始められまし

た。大西学園長は資料が入りだすと、地域研究の授業を受ける学生たちのため民俗資料室を充実させてはどうかと意見を出され、河野健二学部長(当時)も賛同され、状況は変わり始めました。民族の生活を知ることは彼らの社会を理解することにつながり、文化を学ぶことでもあります。

大西学園長は御多忙にもかかわらず私たち研究者の資料蒐集の打合せに時間の許す限り1号館からお出かけ下さいました。

2011年に資料室が図書館2階に広い床面積の展示室をいただくことになり、「中部大学民族資料博物館」の誕生にこぎつけました。私は新しい民族資料を搬入する毎に、大西学園長にお電話を入れました。御支障がない限り日を待たずして見にこられました。昨今では寄贈品が大量搬入され大西学園長は一般の関心が高まってきたことを喜ばれていました。図書館に移設後も午後の休憩時間に散歩と称され御来館いただきました。



展示室を見学される大西学園長

私は、民族資料博物館は後年の大西学園長の憩いの場の一つになっていたかとお察しておりました。最近ではステッキを手にされながらも時々御来館になり、私共は神経を使っていました。大西学園長を民族資料博物館にお迎えして御機嫌の良いお顔に接するのも私たち関係者にとって嬉しいことでした。

昨今では来館者は学生や職員のみならず、春日井市の市民にまで及び大西学園長は天国でご満足なさっていることでしょう。民族資料博物館が今日あるのは大西学園長のご熱意なくしては存在しなかったことを私たちは決して忘れないでしょう。

## 索引

- |  |                                     |   |                                     |
|--|-------------------------------------|---|-------------------------------------|
| <p>◇巻頭<br/>大西学園長を偲んで<br/>春日丘に桜散る一大西良三学園長と民族資料博物館<br/>中部大学名誉教授 畑中幸子<br/>(民族資料博物館アドバイザー)</p> <p>2015 秋季・冬季行事報告</p> <p>◇共催展示<br/>10月 『植物≠女性 イメージは世界をかける』<br/>民族資料博物館 原田千夏子</p> <p>◇共催展示関連シンポジウム<br/>10月 『植物≠女性 バリの祭礼とデザインにみる接点』<br/>民族資料博物館 原田千夏子</p> <p>◇研究室実験<br/>11月 『民族資料博物館 クイズスタンプラリーシステム<br/>一開発および実験に関する報告』<br/>工学部准教授 鈴木裕利</p> | <p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> | <p>◇写真展示<br/>11月 『世界に羽ばたいた中部大生<br/>青年海外協力隊50周年記念写真展』<br/>国際関係学部教授 青木澄夫</p> <p>◇実技講座 研究成果発表展示<br/>3月 平成26年度・平成27年度合同<br/>特別講座『古典絵画』受講生 制作作品発表展示<br/>日本美術院特待 下川辰彦<br/>(民族資料博物館外部専門委員・特別講座指導講師)</p> <p>◇トピック<br/>アフリカ展示リニューアルオープンについて<br/>民族資料博物館副館長 宇治谷 恵</p> <p>書籍紹介</p> <p>2016 上半期(春季夏季)行事案内</p> | <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> |
|--|-------------------------------------|---|-------------------------------------|

10月

共催展示

# 『植物≠女性 イメージは世界をかける』

- 【期間】 2015年10月13日(火)～11月6日(金)
- 【会場】 中部大学民族資料博物館 多目的室
- 【企画】 京都工芸繊維大学アートマネージャー養成講座2014年度生 StepⅢ
- 【指導】 並木誠士 氏 (京都工芸繊維大学教授、京都工芸繊維大学美術工芸資料館長)  
和田積希 氏 (京都工芸繊維大学美術工芸資料館 特任助教)
- 【協力】 中部大学民族資料博物館  
原田千夏子 (民族資料博物館 事務員・学芸員兼務)

入場者：1,313名

今年度の秋季企画展示の時期は、京都工芸繊維大学美術工芸資料館と共催で展示を行うこととなった。

企画は、京都工芸繊維大学が文化庁の助成によって行っている新たな学芸員養成カリキュラム「アートマネージャー養成講座」の学外展示実習の一環で、受講生によるもので、両館の収蔵資料のなかからテーマに合わせた作品資料を展示する内容である。当館は会場の提供とともに、解説作成や展示準備のための協力を行った。

受講生は関西の大学の院生を中心とする若い世代のグループだが、それぞれ専門研究テーマを持ちながら、国内外の美術博物館の実践的なカリキュラムで学習できるこの講座において、実力を培ってきた意欲のある人物で構成され、展示作品資料に対してテーマを通じて観察し、情報調査をして作成した解説を

付記した展示用図録の作成、鉄道の車内吊り広告やポスター、チラシ作成にいたるまでの各種の広報活動を含め、高い専門性を目標に設定して日頃よりトレーニングされている現状を想像することができた。また合わせて、文化祭の期間には、2日間にわたって受講生らによるギャラリートークを開催し、一般の入館者にむけて丁寧な解説を行った。こちらは図録と異なり、わかりやすい言葉で、別途で手持ちの図を用いるなど、聞き手に合わせた工夫を事前に準備を重ねて臨んでいた。

当館では、博物館学課程における博物館実習を実施する点はひきつづきの課題であったが、今回の機会は実質的な実習をより具体的な作業体験を通じた内容で行うことに等しいものとなり、当館においても今後の学生対象の演習や実習指導等を検討するにあたり、非常によい勉強



展示チラシ

の機会となった。関連の展示期間は、1,300名を超える入場者数にのぼり、文理の両分野における学部の教員や学生による見学件数がふだんより目立っていた。テーマ提案の内容や方法によって、多様な分野の興味関心に応えることができるという実感を得ることができ、今後の教材作りに大いに参考となった。

(原田)



展示の様子



ギャラリートーク

# 『植物≠女性 バリの祭礼とデザインからみる接点』

(展覧会「植物≠女性 イメージは世界をかける」関連)

- 日時 | 2015年10月21日(水) 13時30分～
- 会場 | 中部大学不言実行館 アクティブホール
- 企画 | 京都工芸繊維大学アートマネージャー養成講座 2014年度生
- 司会 | 並木誠士氏(京都工芸繊維大学教授・京都工芸繊維大学美術工芸資料館長)
- 協力 | 中部大学民族資料博物館

参加者：45名

## 講演報告『バリの娘たちと花の冠』

講師：嘉原優子(中部大学人文学部日本語日本文化学科 教授)

## 講演報告『アール・ヌーヴォーと植物、女性の表象』

講師：永井隆則氏(京都工芸繊維大学デザイン・建築学系 准教授)

秋季に、京都工芸繊維大学美術工芸資料館と共催で展示を行うこととなり、関連のシンポジウムも展示期間中に同じ、京都工芸繊維大学のアートマネージャー養成講座の受講生によって企画実施された。展示テーマに関連して、シンポジウムでは、二大学の民族学と美術史という双方の観点から植物の「かたち」について考察するため、各大学の研究者の講演により事例が紹介され、次にパネルディスカッションにおいて、「かたち」と「意味」の関連性を考えていくなかで、「植物」を通じて継承されてきた普遍的な要素や時代の変

遷に応じて新たに生み出されてきた要素についてさまざまに討論された。

企画者である講座受講生らは、シンポジウムの開催準備にあたり、それぞれの研究者へ事前に取材に訪れ、展示内容をより深く追究しようという意欲をもって何度も検討を重ねていた。その結果、展示、シンポジウム、ギャラリートークといった一連の取り組みには、一貫したテーマ性を各自の関心から情報を調査収集から、さらに見学者に対する解説作成という、第三者へ発信するまでといった、それぞれの段階を通じて、さまざまな

方面から美術館、博物館という立場におけるテーマ設定について実践的に学ばれていた。

当館においては、収蔵資料の選定の折に、収蔵庫内において、本学の嘉原優子教授の指導のもとで資料を観察する際に、全員で床に手をつきながら資料の詳細を観察しながら記録をとっていった受講生の姿が印象的であり、私自身も収蔵資料の新たな側面を再発見することができた。収蔵資料を教材に活用する機会を増やしていく努力を今後も続けていきたい。(原田)



展示チラシ(裏面)



シンポジウム風景

# 『民族資料博物館 クイズスタンプラリーシステム — 開発および実験に関する報告』

【日時】 2015年11月3日(火)  
 【会場】 中部大学民族資料博物館 常設展示室  
 【企画】 中部大学工学部情報工学科 鈴木裕利研究室

参加者：20名  
 (実験はその他で11月13日、12月3日にも実施)



クイズラリーの様子

中部大学工学部情報工学科鈴木裕利研究室では、民族資料博物館を対象としたデジタルミュージアムシステムに関する研究を進めている。ミュージアムには役割の一つとして教育的活用があり、「事前学習機能」、「現地学習機能」、「事後学習機能」の3つの構成要素が確認される。

鈴木研では、本学民族資料博物館を対象とした「現地学習機能」の提案として、クイズスタンプラリーシステムの開発を進めている。提案システムの画面例を示す(画像A)。

2015年度には開発システムを用いて、大学祭の来館者20

名、博物館関連の講義受講学生28名、国際関係学部のゼミ生と教員21名を対象として実証実験を実施した(画像B)。

実験の参加者には、開発システムを評価するユーザビリティアンケート、および、クイズの内容を評価するコンテンツアンケートの2種類のアンケートに回答をお願いした。ユーザビリティ評価からは、好感度については高い評価を得ているが、信頼性、役立ち度の評価については、参加者によってばらつきがあり、改善の余地があることが確認された。

コンテンツアンケートからは、「楽しい」といったポジティブな

意見を多く得られたが、「問題数が多い」、「不正解時に解説が欲しい」との要望も確認され、クイズコンテンツの改善につながった。

本報告のシステムは、「現地学習機能」の1コンテンツであり、今後は、コンテンツの充実、「事前学習機能」、「事後学習機能」の開発が求められている。

コンテンツの充実については、IT技術の有無にかかわらず、新たなクイズコンテンツを作成できる機能の実装によって、国際関係学部の教員、学生との共同開発を進めている。このような学部間の連携により、システムにとって有益な多様な視点が得られることが期待される。

(鈴木)

謝辞：本研究は中部大学特別研究費(A)の支援を受けて進めている。



画像B

# 『世界に羽ばたいた中部大生 青年海外協力隊50周年記念写真展』

【期間】 2015年11月30日(月)～12月22日(火)  
 【会場】 中部大学民族資料博物館 多目的室、図書館 1階エントランス展示  
 【企画解説】 青木澄夫 (国際関係学部 教授)

入場者：276名

国際関係学部は、独立行政法人国際協力機構(JICA)中部国際センターとの共催により、標記の写真展を2015年11月30日から12月22日にかけて開催した。

JICAは、1965年から現在までにおよそ4万人の日本の青年を、開発途上国や新興国に派遣し、地域の人々の暮らしを支え、草の根レベルの交流を図ってきた。

この写真展は、青年海外協力隊の事業発足50周年を記念して、中部大学とその前身の中部工業大学の卒業生約7万人のうち、青年海外協力隊などJICAボランティア事業に参加した経

験のある方々に、その活動経験を紹介していただき、在学生を含めた若い世代に海外ボランティアへの関心を持ってもらいたいという意図で企画したものである。

同窓生を追跡した結果、アジア、アフリカ、中東、中南米、大洋州などで活躍した34名の青年海外協力隊員の経験者がいることがわかった(開催後さらに3名の卒業生がいたことが判明した)。

そのうち、連絡がついた、20歳代から60歳代までの19名(うち1名はシニアボランティア)の卒業生が、当時の写真や在学生へのエールを送ってくださった。

19名の卒業生の内訳は、中部工大及び工学部が9名、国際関係学部が9名、また現役の大学院生命健康科学研究科看護学専攻1名で、男性13名、女性6名だった。

本学教員で青年海外協力隊員の経験の



写真展風景

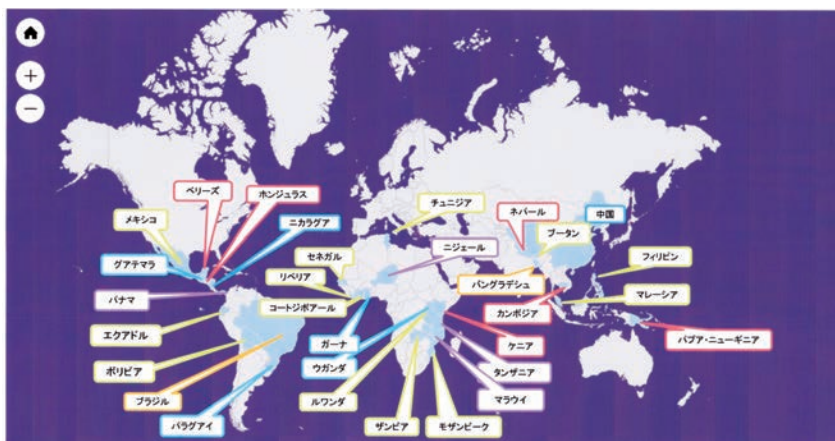


写真展チラシ

ある5名(非常勤講師1名を含む)にも協力を依頼し、元JICA職員の私を含め、総計25名(活動した国は23か国)の展示となった。JICA中部からは、熊谷晃子所長のご挨拶や、ボランティア事業の概要や歴史のパネルを提供していただいた。

ささやかなイベントだったが、図らずも中部大学のグローバル人材育成発表の場にもなり朝日新聞、中日新聞、読売新聞が大きな記事で紹介してくれた。10年後、20年後、青年海外協力隊に限らず、世界を舞台にして活躍する卒業生たちのさらなる飛躍を期待したい。(青木)

\*本展のパネルはカタログにし、本博物館、国際関係学部のHPからデータ・ブックでもご覧いただけます。



中部大学(中部工大)卒業生と教員の足跡

## 特別講座『古典絵画講座』

平成26年度・27年度合同  
特別講座受講生 制作作品発表展示

- | 期間 | 2016年3月23日(水)～4月7日(木)  
講評会 2016年4月7日(木) 16:00～
- | 会場 | 中部大学民族資料博物館 多目的室、図書館1階エントランス展示
- | 指導講師 | 下川辰彦 (日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員)
- | 企画 | 原田千夏子 (民族資料博物館 事務員・学芸員兼務)

入場者：478名

本講座は、大学博物館が開館する契機に博物館から、大学の専門研究の一端を一般へ生涯学習のかたちで伝達したいという提案を受けて始まりました。昨年度より通年を通じての開講となり、受講生は作品制作によりじっくりと取り組めるようになりました。今季の展示は、昨年度開講者と合同の成果発表展示とし、一人当たり年間に複数の作品に挑戦する受講生もあることから、展示総数は34点にのぼりました。

現代の日本画作品の制作方法には、絹絵や板絵など、日本的な文化が花開いた平安時代の伝統的な古画の技法が息づいていま

す。そうした素材や技法について実技制作を通じて体験することによって、絵画の世界をより深く理解できる機会となるのではないかと思い、受講生各自の選択制にもとづき、基底材を選ぶことができるようにし、個々の進行に応じた指導をこころがけるようにしています。私自身、日本画の作家として制作を続ける傍ら、付属の高校、短期大学、大学と中部大学には約40年にわたり様々な年齢層の学生と向き合ってきました。この経験が少しでもお役に立てればと思っております。

「伝統」を保存し継承するという使命とともに、それを感じ取り



展示チラシ

理解する柔軟な心を私たちはいつまでも持ち続けていきたいものです。それは、難解に考えるというよりも、五感を通じて体感することなのです。自身の体を通じて得た体験は、自身の言葉によって説明することができます。

日本画を通じて、ひとりでも多くの人々が、次の世代に自身の言葉によって、先人の作り上げた素晴らしい美意識とその表現を語り続け、今、生きている時代の感覚とともに理解していくことのできる環境作りのお手伝いできれば嬉しく思います。

(下川)



展示風景



講評会風景

受講生が作品制作に十分向き合う時間をとることができるようにするため、平成26年度から本講座は通年制をとることになった。平成26年度は制作の進行度の取り方がかわったせいか、複数枚の作品をてがける人も多い一方、作品への高い創作意欲のためか、納得した完成に到達しない人も何人かあったため、成果発表展示は翌年度と合同で開

催することとなった。講座の約半数は2年間継続して制作に向き合ったことから、今回の展示では驚くほどの成長の様子を全員作品からみることができ、指導講師の講評は、より高度な内容に高めていくことができるような示唆を、一人一人の状況に応じて適切に与えていた。参加者の表情は真剣で、指導講師の言葉をもらすまいとメモをとる姿

も多かった。絹絵、板絵、日本画という多様な基底材を同じ講座時間帯に制作を指導できる点は、指導講師の豊かな経験と配慮ゆえに実現できていることをあらためて感じ入った。担当者にとっても作品を制作者の観点から眺めることは非常に勉強になる。来季もまたより意義深い大学博物館における生涯学習の実践の場となることを願う。(原田)

## アフリカ展示 リニューアルオープンについて

宇治谷 恵 (民族資料博物館 副館長)

平成 28 年 5 月 10 日 (火) に新たにリニューアルオープンしたのがアフリカ展示コーナー (主な展示資料を松浦コレクションと呼ぶ) です。

この松浦コレクションとは、本学の学事顧問である松浦晃一郎先生が収集された木彫や仮面などのアフリカ資料を民族資料博物館が受け入れたものです。5 月 10 日にはこれら資料の公開を記念して式典を開催しました。式典では、松浦先生にはご多忙中のところ奥様ご同伴でご臨席いただき、飯吉理事長はじめ多くの関係者のご出席をいただき、テープカット等の式を無事に開催することができました。また、午後からは記念シンポジウムを開催するとともに、同時に、アフリカ展示場では西アフリカの生活資料、類人猿関連資料、東アフリカのコーヒー生産用具などの展示拡充により多様で多彩なアフリカ文化を紹介するようにしました。



松浦先生は 1937 年に山口県でお生まれになり、その後、外務省入省、在ガーナ大使館に勤務されてからアフリカ各地に訪れられました。また、アフリカの歴史や文化にも造詣が深く、アフリカ赴任中に仮面や彫像を集められました。その後、外務審議官や駐仏日本大使などの要職をへられ、1999 年から 2009 年まで 2 期 10 年にわたりユネスコ事務局長を務められ、「無形文化遺産の保護に関する条約」の採択など世界の「文化遺産」の保存活動に大きく貢献されました。世界遺産は不動産のみを対象としていた時代から、有形・無形の動産にいたる多様な文化遺産の保護も重要であると提唱されてきました。そのような、松浦先生から、2 年ほど前に、アフリカの木彫や仮面約 100 点をご寄贈いただける話があり、その後、民族資料博物館にて資料の集荷、整理と展示作業をおこない、この度、皆様に公開することができるようになりました。

さて、民族資料博物館は開館して丸 5 年を経過します。大学博物館は有形・無形の学術資料を収集・保存、公開し、これらの資料を組織的に独自の調査研究をおこなうことで学術研究と高等教育に資するだけでなく、展示や講演会、そして情報提供などを通して「地域や社会に開かれた大学」の窓口としてその役割を発揮することが期待されています。今後とも民族資料博物館一同、ご期待に応えるように努力を続けます。これからも、多くの皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

## 書籍紹介

### 大西良三 著 『学園回想』

風媒社 2012年

目次より

- [第一章] 忘れえぬ人
- [第二章] 決断のとき
- [第三章] キャンパスの作品群
- [第四章] キャンパスの逍遙



大西良三先生(学校法人中部大学 学園長・学校法人中部大学 第三代理事長)が学園創立者の三浦幸平先生をはじめ、多くの先生方とともに本学を作られてきた足跡を回想する内容です。

私たちのキャンパスの風景は、さまざまな人びとの温かい眼差しによって見守られながら、今日の姿となってきた歴史をかいまみることができます。

平成28年4月20日に、大西良三学園長が御逝去されました。当館のアドバイザーとして生前賜りました御厚情に深く感謝申し上げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

2016

上半期(春季夏季)行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

#### ◆新規資料公開

### アフリカ資料公開記念式典・シンポジウム

会期：平成28年5月10日(火)  
 場所：中部大学民族資料博物館 常設展示内  
 中部大学不言実行館 アクティブホール

#### ◆考古学調査展示

### 「エジプトの沙漠からオロンテス河畔まで : 中部大学の教員が関わる エジプト、シリアにおける考古学調査」

会期：平成28年7月4日(月)～8月7日(日)  
 場所：中部大学民族資料博物館  
 主催：中部大学民族資料博物館  
 協力：公益財団法人 古代オリエント博物館